

症例・実践報告

採血演習における患者役割体験についての学生の認識 —採血終了後の調査から—

平田礼子, 山崎智代, 細矢智子, 小山英子

つくば国際大学医療保健学部看護学科

【要 旨】本研究は、基礎看護技術演習における学生間採血による患者役割を体験して学生はどのように考え、感じていたのか、具体的には患者役割体験をととして患者の心理の理解や技術習得に役立ったか、患者役割を体験して良かったか、困ったことがあったか、についての学生の認識を明らかにすることを目的に質問紙調査を行った。対象は、本研究の協力が得られた学生 58 名で、その結果から以下のことが明らかになった。1. 患者役割体験を全体の 94.9%の学生は体験して良かったと肯定的に受け止めていることが明らかになった。2. 患者役割体験をととして患者の心理が理解できたと回答した学生は全体の 98.3%を占め、理由記述で最も多かったのは、「患者の不安・緊張・恐怖を理解」で、次いで「看護師の行動が患者の心理に及ぼすことの理解」であった。3. 患者役割体験が採血技術習得に役立ったと回答した学生は全体の 98.3%を占め、患者役割体験をととして採血実施上重要な技術を学んだと認識していることが明らかになった。(医療保健学研究 第1号: 171-182 頁)

キーワード: 基礎看護技術, 採血演習, 体験学習, 患者役割

序 論

基礎看護技術演習において体験学習は、看護師役と患者役の双方の体験を通し、看護者としての役割意識を育成し、患者の気持ちにより近づき、効果的な学習を期待できる学習形態である。厚生労働省の看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討委員会報告は、基礎看護

技術の学内実習は、学生が看護技術を学習する上で不可欠であり(大西と大串, 2001; 嘉手苅 他, 2001)、中でも体験学習を取り入れることは、学びが深められる発展的な学習につながり良い機会となると述べている(竹尾 他, 2003)。また穴沢と松山(2004)は、この体験学習について「より実践に近い学習を学生に提供することになると同時に、患者の立場に立った看護実践を行っていくための動機づけになっている」と述べている。さらに、細矢ら(2008)は、患者役割体験について学生は、患者の心理や看護技術の要点を理解する上で役立つという認識を強く持つことを明らかにしている。しかし、ここでは日常生活援助に焦点をあてたものである。

連絡責任者: 平田礼子

〒300-0051 茨城県土浦市真鍋6-8-33

つくば国際大学医療保健学部看護学科

TEL: 029-826-6622 (内線3104)

FAX: 029-826-6776

e-mail: r-hirata@tius-hs.jp

看護技術の一つである静脈内採血は、「食事の介助」や「清拭」などの日常生活に根ざした援助とは異なり(大西と大串, 2001; 嘉手苅 他, 2001)、医師の指示によって実施する看護技術である。また、人に針を刺すという、身体侵襲性の高い技術でもある。従って、学生が初めて人に針を刺す行為は、緊張感や不安感を強く感じ血圧や心拍数にまで影響を及ぼすほどの強烈な経験であることが明らかにされている(杉山 他, 2002)。南ら(2008)は学生間採血演習がどのような体験となっているのかを実施後の学びのレポートから分析し、学生間採血実施による不安や恐怖、患者に与える影響、モデル人形との感触の違い、練習とは異なる技術上の困難感、看護師の技術・態度が与える苦痛の大きさを実感する場となっていると報告している。一方、血管モデルでの練習には限界があることも明らかにされている。嘉手苅ら(2006)の研究によると、学生間採血演習があったほうがよいと答えた回答理由として最も多くあげられていたことは血管モデルの限界であった。これらの研究から採血演習における患者役割体験は、患者の立場となる体験をとおして患者の心理や苦痛を理解し、また、看護師役の行動を観察し、患者の立場から看護師として求められる行動を学ぶ機会であると考えられる。

このように学生間の採血演習の学習効果が明らかにされているが、採血において患者役割を体験することは、前述のように身体侵襲を伴う。身体侵襲を伴う技術演習で患者役割を体験した学生は、どのように考え、感じているのか。

患者役割体験が患者の心理の理解や看護技術習得に役立っているのだろうか。学生の演習後の認識を明らかにすることは今後の演習内容や方法を検討する上で役立つものと考えられる。本研究の目的は、学生間採血演習における患者役割を体験した学生の認識を明らかにすることである。

方 法

研究対象

平成 20 年度 T 大学看護学科 2 年生で、研究協力の同意が得られた 58 名を対象とした。

研究方法

質問紙調査は、平成 20 年 7 月 28 日の採血演習実施終了直後に集合法にて行った。質問紙は無記名で個人が特定されないこと、本研究以外には使用しないことを前提とし、文書と口頭で研究の趣旨・内容、参加・拒否の自由、成績の評価には関係ないことを説明し、署名による同意を得た。

調査内容は、採血をされるという患者役割体験から、「患者の心理が理解できたと思うか」、「技術習得に役立ったか」、「体験してよかったと思うか」、「患者役割を体験して困ったことがあったか」の 4 つとした。これらの設問についての回答を、「非常にそう思う」「そう思う」「あ

表 1. 患者役割体験後の学生の反応について。

項目	非常にそう思う		ややそう思う		あまりそう思わない		全くそう思わない		有効回答数(有効回答率)		無回答	
	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%	人数	%
患者の心理が理解できたと思うか	41	70.7	16	27.6	1	1.7	0	0	58	100	0	0
患者役割体験は技術習得に役立ったと思うか	44	75.9	13	22.4	1	1.7	0	0	58	100	0	0
患者役割体験をしてよかったと思うか	44	75.9	11	19	2	3.4	0	0	57	98.3	1	1.7
患者役割体験をして困ったことはあったか	5	8.6	13	22.4	16	27.6	23	39.7	57	98.3	1	1.7

表 2. 患者の心理が理解できたと思う理由(全 74 件).

カテゴリー	記述内容 (一部抜粋)
患者役割体験から 患者の不安・緊張・恐怖 を理解(42件)	・すごく不安を感じた ・自分の血管が見にくかったのでどこに刺されるのか不安だった ・注射をされる時に、本当に大丈夫かなと不安になった ・針を見て緊張した ・実際に刺されるということでも緊張した ・とても緊張した。「早く刺してくれ」と思った ・針への恐怖心をあらためて実感することができた ・刺される時の恐さは、やはり無くなりません ・患者の体験をすることによって、痛みや苦痛感などを理解できた
看護師役が行動が患 者の心理に及ぼすこ との理解 (31 件)	・自信を持って刺入しないと不安になる ・看護師が不安そうにしていると自分も不安になってすごくこわかった ・注射器をもって焦ったりされると、患者さんは不安になると思った ・注射器の持ち方が変だったので怖かった ・声かけがないと不安になることがわかった ・看護師があたふたとしていると不安に思ってしまうことがよくわかった
病院等で受ける時と同じ (1件)	・スムーズに採血をしてもらえたので、病院や健康診断でやってもらう時と同じ感じだった

表 3. 患者役割体験の採血技術習得に役立った理由(全 75 件).

カテゴリー	記述内容 (一部抜粋)
患者役割体験から 患者の不安・緊張・恐怖 を理解(42件)	・すごく不安を感じた ・自分の血管が見にくかったのでどこに刺されるのか不安だった ・注射をされる時に、本当に大丈夫かなと不安になった ・針を見て緊張した ・実際に刺されるということでも緊張した ・とても緊張した。「早く刺してくれ」と思った ・針への恐怖心をあらためて実感することができた ・刺される時の恐さは、やはり無くなりません ・患者の体験をすることによって、痛みや苦痛感などを理解できた
看護師役が行動が患 者の心理に及ぼすこ との理解 (31 件)	・自信を持って刺入しないと不安になる ・看護師が不安そうにしていると自分も不安になってすごくこわかった ・注射器をもって焦ったりされると、患者さんは不安になると思った ・注射器の持ち方が変だったので怖かった ・声かけがないと不安になることがわかった ・看護師があたふたとしていると不安に思ってしまうことがよくわかった
病院等で受ける時と同じ (1件)	・スムーズに採血をしてもらえたので、病院や健康診断でやってもらう時と同じ感じだった

表 3. 患者役割体験の採血技術習得に役立った理由(全 75 件).

カテゴリー	記述内容 (一部抜粋)
患者役となつての 気づき・学びがあ ったから (28 件)	・心理的なことや痛みなど、患者役を体験したことにより、自分が看護師役の時になにが必要かを考えることができた ・駆血帯を巻いた時に痛みがわかった ・針刺入時の痛みがわかった ・抜針時の痛みがわかった ・すばやく確実に行うことの大切さ ・声がけをすることは患者さんの不安を取り除くのにも重要な役割をしていると感じた ・患者側から実際の作業を観察することで、自分も気をつけるべき所が発見できた ・たくさん練習して、痛くない採血をするべきと感じたから ・恐怖とか痛みが分かるので役に立った ・丁寧に声がけをしてもらえたので安心できた ・不安な気持ちを軽減する大切さがわかった ・落ち着いて採血を行えることが重要であると感じた ・患者の不安を顔などしっかりみて観察すべきと思った ・患者体験をとおして冷静さが大事だということを習得した
看護師役 of 行動・ 手技がわかったか ら (23 件)	・駆血帯の巻き方を正確に行わなければ恐怖を与えてしまうことがわかった ・駆血帯のしめ具合が分かるようになりました ・注射器の持ち方が正確でなければ恐怖を与えてしまうから ・注射器をきちんと固定すれば、余分な痛い思いをせずにすむ ・患者の目の前でてきぱき正確に作業を行わなければ恐怖を与えてしまうから ・どのように刺入すれば痛くないかがわかったから ・どのような血管を選択すれば痛くないかがわかったから ・針の固定の大切さがわかった ・どのくらいの角度で刺せばいいのかがわかったから
患者の気持ち・ 心理面がわかった から (18 件)	・患者さんがどういう気持ちで採血を受けているのかが体験できたから ・患者さんの不安や緊張がわかった ・患者側としては早く終わってほしいという気持ちとなった ・1 回で採血してほしいという気持ちになった ・心理面など把握できるから ・患者の気持ちが理解できた ・患者の気持ちを知ることができたため
患者役割体験の 必要性を実感した から (6 件)	・よい経験になったと思う ・患者を知る上で、大切なことだと思う ・モデル人形と全く違うから ・採血は痛みを伴う技術なので、自分がその痛みを知っているということは大切だと思う

まりそう思わない」「全くそう思わない」の 4 段階で回答してもらい、その回答ごとの理由について、自由記述を求めた。

分析は、4 つの質問項目の回答を設問毎に単

純集計を行った。回答ごとの理由についての自由記述は、記述内容を一つの意味をなす文脈に細分化し、類似性に従って分類・整理した。分析は、4 人の研究者間でくりかえし検討した。

学生間採血演習の状況

平成 20 年 6 月中旬に静脈内採血についての講義後、学生間での採血実施に関する紙面による説明書及び同意書を配布し、学生間採血実施の目的、実施の流れ・実施にあたっての注意事項について説明をおこなった。その後、同意書は、締切り期日を決めて後日回収した。講義の翌週にモデル人形を使用した採血演習を 1 グループ 3~4 名編成で実施した。演習終了後に学生間で行う採血のペアを公表し、各自で相手の採血部位にあたる血管を確認するように説明した。

学生の中には、血管が見え難いことを事前に相談する者もあり、教員と一緒に採血が可能な血管を確認する等の配慮を行った。また、学生間採血実施日までの期間(約 1 ヶ月空けての設定とした)は、モデル人形を用いて採血の自己練習を十分行うことが出来るようにした。

採血実施は、学生 1 グループ 3~4 名に 1 人の教員が担当し、マンツーマンで指導が出来るようにした。事前に実施に向けての教員間の打ち合わせを行い、指導内容及び注意事項について確認した。また、当日は学生の安全が十分確保出来るように、採血演習時間は、学内の所定の場所に医師が一人待機する体制を整えた。患者役の学生は、半そでの T シャツ、ジャージに着替え、オーバーテーブルを使用し、座位で実施した。学生は、患者役と看護師役をペアで交代して行った。

結 果

質問紙調査の回収は、調査対象 58 名に対し全員の回収であり、各設問に対する有効回答数は表 1 に示すとおりである。

患者の心理が理解できたと思うか

「非常にそう思う」、「そう思う」を合わせた

回答(以下「そう思う」とする)が 57 人(98.3%)であった(表 1)。「そう思う」と回答した理由についての記述から、74 コードを抽出した。これらを分析した結果、『患者役割体験から不安・緊張・恐怖を理解』に関する記述、『看護師役が行動が患者の心理に及ぼすことの理解』に関する記述、『病院等で受ける時と同じ』に関する記述の 3 カテゴリーに分類した。

3 つのカテゴリーの中で最も多かったのは、『患者役割体験から不安・緊張・恐怖を理解』に関する記述が 42 件で、その内容として「すごく不安を感じた」「針を見て緊張した」「とても緊張した『早く刺してくれ』と思った」「針への恐怖心をあらためて実感することができた」「刺される時の恐さは、やはり無くなりません」などであった(表 2)。

次いで、『看護師役が行動が患者の心理に及ぼすことの理解』に関する記述が 31 件で、その内容には「看護師が不安そうにしていると自分も不安になってすごくこわかった」「注射器の持ち方が変だったので怖かった」「声かけがないと不安になることがわかった」などがあつた。

『病院等で受ける時と同じ』に関する記述は 1 件で、その内容には「スムーズに採血をしてもらえたので、病院や健康診断でやってもらう時と同じ感じだった」などであった。

また、「あまりそう思わない」が 1 人(1.7%)であったが、その理由は、「友達だと思うと、初めての患者さんの採血にあたる時の気持ちは、全てを理解しきれない。」であった。

患者役割体験は技術習得に役立ったか

「そう思う」の回答は 57 人(98.3%)で、ほとんどの学生が役立ったと回答していた(表 1)。「そう思う」と回答した理由についての記述から、分類不能な 1 件を除外し、75 コードを抽出した。これを分析した結果、『患者役となつての気づき・学びがあつたから』に関する記述、『看護師役が行動・手技がわかつたから』に関

する記述、『患者の気持ち・心理面がわかったから』に関する記述、『患者役割体験の必要性を実感したから』に関する記述の4カテゴリーに分類された(表3)。

4つのカテゴリーの中で最も多かったのは、『患者役となつての気づき・学びがあったから』に関する記述の28件で、その内容には「不安な気持ちを軽減する大切さがわかったから」「丁寧に声かけをしてもらえたので安心できた」「患者側から実際の作業を観察することで、自分も気をつけるべき所が発見できた」「恐怖や痛みが分かるので役に立った」「なるべくすばやく正確に行おうと思えるようになった」「抜針時の痛みがわかったから」「患者体験をとおして冷静さが大事だということを知得した」などがあった。次いで、『看護師役の行動・

手技がわかったから』に関する記述の23件で、その内容として「看護師役をみていると細かい点に気づける」「どのように刺入すれば痛くないかがわかったから」「どのような血管を選択すれば痛くないかがわかったから」「どのくらいの角度で刺せばいいのかがわかったから」「針の固定の大切さがわかった」「脈血帯の締め具合がわかった」などがあった。

『患者の気持ち・心理面がわかったから』に関する記述は18件で、その内容は、「患者の気持ちが理解できた」「不安や緊張がわかった」「患者側としては早く終わってほしいという気持ちになった」「1回で採血してほしいという気持ちになった」などであった。

『患者役割体験の必要性を実感したから』に関する記述は6件で、内容として「よい経験に

表4. 患者役割を体験して良かったと思う理由(全65件)。

カテゴリー	記述内容 (一部抜粋)
患者の気持ちの理解 (42件)	・患者の心理面が理解できた ・患者の心理に近づけた気がしたのでよかった ・心境がよくわかった ・1度でも患者役を体験していれば、患者さんの心情もこんなときどう思っているのかもわかるので良かったと思う ・患者さんの気持ちや、どう感じているのかということを考えることが出来たから ・患者役を体験することにより、不安に思う気持ちなどが理解できた ・採血されて、ということが不安かわかった ・患者役を体験したことにより、自分が看護師役の時になにが必要かを考えることができた ・針の固定が不安定だと患者が不安になることが学べた
看護師役の行動を見ての理解 (8件)	・看護師役の手際や態度で患者が不安になったりすることが分かったから ・看護師役のいたわりの気持ちが伝わってきた為 ・患者さんに不安そうな顔を見せないということを学んだので、体験してよかったと思う ・丁寧に声かけをしてもらえたので安心できた
体験の必要性の理解 (6件)	・初めての人に刺してみても事の重みがわかった ・患者を知る上で、大切なことだと思った
痛みの体験をとおしての理解 (5件)	・患者の痛みなどを理解することによって、これからの実習に活かせると思う ・刺入はスムーズに行った方が痛みが少ないことがわかった ・注射が苦手な人もいるので、打たれる痛みを体験することは、よい体験になったと思う
採血技術の確認 (4件)	・手順など確認できたから ・脈血帯はすばやく巻くようにしようと思った

表 5. 患者役割を体験して困った理由と困らなかった理由(全 52 件).

困った理由 (27 件)	
カテゴリー	記述内容 (一部抜粋)
看護師役の 未熟な 採血手技 (14 件)	・ ゆっくり針を刺入されると痛い ・ 深く刺さりすぎた ・ 刺入してから少しずつ針が進んでいた ・ 血管の位置から針先がずれているのをみていて、ちょっと恐かった ・ 1 回引いたとき、血液が出なかった ・ 深く刺された時少し痛かった ・ 駆血帯をはずすのを忘れた ・ 駆血帯の巻きすぎで手がしびれた ・ 駆血帯がきつすぎた ・ 駆血帯をしめている長さも長く感じた ・ 1 回失敗されると次針を刺されるのは嫌だと思ったから
採血実施に ともなう 不安・恐怖 (5 件)	・ 血管をいつもさしているところと違うところを選択されて不安に感じた ・ 血液が流れないままの沈黙の時間が長かったので少し怖かった ・ 看護師が不安な顔をすると患者も不安になるのでそこが困った
血管が 見え難い (5 件)	・ 自分の血管が出にくい ・ 自分の血管が見えないこと ・ 自分の血管が見えにくいし、細いので不安でした
心理的な負荷 (3 件)	・ 不安なのに言うに言えない空気が辛かった ・ 準備で待つ時間が凄く辛かった
困らなかった理由 (25 件)	
カテゴリー	記述内容 (一部抜粋)
特に問題が なし (17 件)	・ 1 発で採血してくれたので、特に困ることはなかった ・ 患者さんの気持ちを考えることができたので別に困ったことはなかった ・ 特に困ったことはなく採血できた ・ 失敗されたらどうしよう、何かあったらどうしようと思っていたが、何もなかった ・ 特に何も困ることはなかった
スムーズに実 施 (6 件)	・ いつもより緊張したけれど、スムーズに進んだ ・ スムーズに行えたため ・ 看護師役の方が、きちんとできていたから
体験は有益 (2 件)	・ 体験することは、患者さんの不安などの気持ちを理解できるのに良いと思う ・ 全てが利益だった

なったと思う」「モデル人形と全く違うから」
などがあった。

「あまりそう思わない」の回答は、1 人(1.7%)
で、その理由として、「看護師役が先だったのでわからない。患者役を先に行っていたら、もっと注意深く出来たと思う。」であった。

患者役割を体験して良かったか

「そう思う」の回答が 55 人(94.9%)であった
(表 1)。「そう思う」と回答した理由について
の記述から、分類不能な 1 件を除く 65 件のコ
ードを抽出した。これを分析した結果、カテゴ
リーは『患者の気持ちの理解』に関する記述、

『看護師役の行動を見ての理解』に関する記述、『体験の必要性の理解』に関する記述、『痛みの体験をとおしての理解』に関する記述、『採血技術の確認』に関する記述の5つのカテゴリーに分類された(表4)。

5つのカテゴリーの中で最も多かったのは、『患者の気持ちの理解』に関する記述が42件で最も多く、内容には、「患者さんの気持ちがわかった」「患者の心理に近づけた気がしたのでよかった」「心境がよくわかった」「患者さんの気持ちやどう感じているのかということを考えることが出来たから」「採血されてどうということが不安かわかった」「針の固定が不安定だと患者が不安になることが学べた」などがあつた。

次いで、『看護師役の行動を見ての理解』に関する記述が8件で、その理由として、「看護師役の手際や態度で患者が不安になったりすることが分かったから」「丁寧に声かけをしてもらえたので安心できた」などがあつた。

『体験の必要性の理解』に関する記述は6件で、その理由として「患者を知る上で大切なことだと思った。」などがあつた。

『痛みの体験をとおしての理解』に関する記述は5件で、その理由として、「刺入はスムーズに行ったほうが、痛みが少ないことがわかった」「注射が苦手な人もいるので、打たれる痛みを体験することは、よい経験になったと思う」などであつた。

『採血技術の確認』に関する記述は4件で、その理由として、「手順など確認できたから」「駆血帯はすばやく巻くようにしようと思った」などであつた。

「あまりそう思わない」の回答は、2人(3.5%)で、その理由として、「普段の健康診断でも体験している」であつた。

患者役割を体験して困ったことがあつたか

学生が困ったことがあつたと回答した「そう思う」は18人(31.0%)あり(表1)、「そう思う」

と回答した理由についての記述から、27コードを抽出した。これを分析した結果、『看護師役の未熟な採血手技』に関する記述、『採血実施に伴う不安・恐怖』に関する記述、『血管が見え難い』に関する記述、『心理的な負荷』に関する記述の4カテゴリーに分類された(表5)。

『看護師役の未熟な採血手技』に関する記述は14件で、「ゆっくり針を刺されると痛い」「刺入してから少しずつ針が進んでいた」「深く刺された時少し痛かった」「駆血帯をはずすのを忘れた」「駆血帯がきつすぎた」「駆血帯の巻きすぎで手がしびれた」などであつた。

次いで、『採血実施に伴う不安・恐怖』に関する記述は5件で、「血管をいつも刺しているところと違うところを選択されて不安に感じた」「血液が流れないままの沈黙時間が長かったので少し怖かった」「看護師が不安な顔をすると患者も不安になるのでそこが困った」などであつた。

『血管が見え難い』に関する記述は5件で、「自分の血管が出にくい」「自分の血管が見えにくいし、細いので不安だった」などであつた。

『心理的な負荷』に関する記述は3件で、「不安なのに言うに言えない空気が辛かった」「準備で待つ時間が凄く辛かった」などであつた。

一方、学生が困らなかったと回答した「そう思わない」は39人(67.3%)で、半数以上の学生が患者役割体験で困ったことがなかったと回答した(図4)。「そう思わない」と回答した理由についての記述から、分類不能な1件を除く25コードを抽出した。これらを分析した結果、『特に問題がなし』に関する記述、『スムーズに実施』に関する記述、『体験は有益』に関する記述の3カテゴリーに分類された(表4)。

3つのカテゴリーの中で最も多かったのは、『特に問題がなし』に関する記述の17件で、その内容として「特に困ったことはなく採血できた」「失敗されたらどうしよう、何かあつたらどうしようとおもっていたが、何もなかった」などがあつた。

『スムーズに行えた』に関する記述は6件で、

その内容として「いつもより緊張したけれど、スムーズに進んだ」「看護師役の方がきちんとできていたから」などがあった。

『体験は有益』に関する記述は2件で、「体験することは、患者さんの不安などの気持ちを理解できるのに良いと思う」「全てが利益だった」であった。

考 察

採血技術援助における患者役割体験をとおして、患者役割体験と患者心理の理解について、患者役割体験と採血技術の習得についての2点について考察する。

患者役割体験と患者心理の理解について

学生間で実施した採血演習における患者役割体験を体験して良かったと学生 55 人(94.9%)は回答し、肯定的に受け止めていた。このことは、採血されることに対する身体的、心理的な負荷以上に実際の採血体験から得られる学びが多かったことを示唆している。さらに、学生同士で不安や緊張を抱えながらも実際に採血を行うことが出来たことは、実施における達成感を得られることを実感する機会となり、学習への意欲の向上につながったのではないかと考える。

また、学生間で実施した採血演習における患者役割体験を体験して患者の心理が理解できたと学生 57 人(98.3%)が回答し、患者役割体験によって患者の心理を理解していた。

南ら(2008)は、「学生間の採血演習は、患者役割・看護師役割のどちらにおいても不安や緊張、恐怖を感じるものであり、モデル人形と人との違いやモデル人形での練習とはことなる技術上の困難点、看護師の技術や態度が患者に与える影響の大きさを実感する体験になっている」と述べている。本調査結果では、設問項目の「患者の心理が理解できたと思うか」と

「体験してよかったと思うか」において、患者役割を体験したことで、①採血を受ける患者の心理の理解②看護師の行動が患者の心理に影響を及ぼすことが理解できたと回答した学生が多かった。このことから、実際に学生自身が身を持って採血をされるという体験のインパクトは強く、痛みなどの身体への侵襲を伴う看護技術であるがゆえに、採血をされる患者の不安、緊張、恐怖を実感し、患者の立場になって考える機会となったのではないかと考える。

また、学生は患者役として看護師役の学生の行動を観察する中で、どのような行動が患者の不安・緊張・恐怖につながるのかを感じとっていた。嘉手苅ら(2006)は、「実際に採血の中で、看護者役と患者役の双方の体験が学生の中で影響し合って直接的体験以上の気づきをもたらしている」と述べている。本調査でも、看護師役の採血時の行動をつぶさに観察することで、手際の悪さや注射器の持ち方、針の刺入部位・角度・刺入の深さ、緊張した雰囲気や、声かけがないと不安になることなどに気づき、この体験をとおして看護師の行動が患者の心理に与える影響を理解できたと認識していることが明らかになった。

患者役割体験と採血技術の習得について

患者役割体験が技術習得に役立ったと答えた学生が 57 人(98.3%)であり、その理由記述においても患者役割体験の必要性を実感したものが多くみられ、採血技術習得に必要な体験であることを示している。

嘉手苅ら(2006)は、「学生は実際の採血を通して対象を観察する重要性を身をもって知ることになり、『学んだ方法をそのまま目の前の対象に適応しようとする自分に気づく』という、技術修得上重要な節目となる体験ができる」と述べている。本調査においても、学生は血管の選択、刺入の仕方、針の固定、駆血帯の巻き方等の採血実施上重要な技術を学んでいることが明らかになった。学生は自らが痛みを伴う患

者役体験をするがゆえに、真剣に看護師役の行動を観察し、自己の技術習得に活かそうとしていたことが伺える。

本調査では、患者役、看護師役のどちらを先に実施したかは明らかにしていないが、先に患者役割を体験した学生は、その時の思いや気づいた事を自己の看護師役での体験の際にいかし、先に看護師役を体験した学生は、その後の患者役体験の際に、看護師役での自分の行動をふりかえることで、学びを深めていたことが記述より伺える。このことは、役割の順序性が学びに与える影響について考える必要性を示唆している。

南ら(2008)は、「学生は、学生間採血演習をモデル人形では体験することができない多くの学びと今後の学習や技術練習への動機づけとなる価値ある経験と捉え、患者の不安・緊張・苦痛の軽減につながるケア内容や安全・確実な採血ポイントとともに、採血における人間的側面への援助的な関わりの重要性を学んでいる。」と述べている。本調査結果からも、学生は、採血演習の一連の行動の中で患者への丁寧な声かけや不安の軽減につとめる大切さがわかったなど、患者への配慮の必要性に気づいており、この採血演習内での学生間のやりとりをとおして、援助的な関わりの重要性を学んでいることが明らかになった。さらに、学生は、自己の行動を振り返り考えることによって、看護師としてのあり方を含め採血技術の修得上、重要な要素である安全面に留意した採血手技を学んでいたのではないかと考える。

一方、学生が挙げた採血実習における「患者役割を体験して困ったこと」については、採血の手技的な内容が多くみられ、採血実施時の個々の学生に対する指導の工夫・指導を一層改善することが必要であると思われる。同時に、教員は学生の不安・緊張などの気持ちを受けとめ、学生への配慮を意識し、指導していくことが求められると考える。

本研究は、T 大学という限られた教育環境の中で行われ、対象人数が少ないことが研究の限

界としてあげられる。今後の課題として、患者役割体験の順序性との関係及び、採血演習実施後のレポートによる、学びの分析等を今後検討していきたい。

まとめ

学生間での採血演習を実施した 58 名を対象に、患者役割体験についての学生の認識を調査した結果、以下のことが明らかになった。

- 1) 患者役割体験を全体の 94.9%の学生は体験して良かったと肯定的に受け止めていることが明らかになった。採血されることに対する身体的、心理的な負荷以上に、実際の採血体験から得られる学びが多かったことが示唆された。
- 2) 患者役割体験をとおして患者の心理が理解できたと回答した学生は全体の 98.3%を占めていた。その理由記述で最も多かったのは、「患者の不安・緊張・恐怖を理解」で、次いで「看護師の行動が患者の心理に及ぼすことの理解」であった。
- 3) 患者役割体験が採血技術習得に役立ったと回答した学生は全体の 98.3%を占めていた。学生は、患者役割体験をとおして採血実施上重要な技術を学んだと認識していることが明らかになった。

謝 辞

本研究をすすめるにあたり、研究に同意し御協力頂いた学生の皆様に、心より感謝いたします。

参考文献

穴沢小百合, 松山友子 (2004) わが国の看護基礎教育課程における基礎看護技術演習に

- 関する研究の動向－1991～2002 年に発表された文献の分析－. 国立看護大学校研究紀要. 3: 54-64.
- 大西香代子, 大串靖子 (2007) 基礎看護技術演習の体験に関する遡及的調査. 三重看護学誌. 9: 89-95.
- 嘉手苺英子, 棚原節子, 仲宗根洋子, 名城一枝, 大田貞子, 金城忍 (2001) 看護技術の立体像に導かれた採血技術の修得を促す教育方法. 沖縄県立看護大学紀要. 2: 67-75.
- 嘉手苺英子, 金城忍, 名城一枝, 安里葉子 (2006) 実際に採血を行う技術チェックの看護技術教育上の意義. 沖縄県立看護大学紀要. 7: 17-24.
- 杉山敏子, 渡邊生恵, 柏倉栄子, 菊地史子 (2002) 看護学生が初めて注射針を刺入する際の生理心理指標の変化. 東北大学医療技術短期大学部紀要. 11: 221-228.
- 竹尾恵子, 内布敦子, 大内宏子, 川原礼子, 神田律子, 木村光江, 國井治子, 世古美恵子, 辻本好子, 西澤寛俊, 濱田悦子, 正木治恵, 柳田喜美子, 渡津千代子 (2003) 看護基礎教育における技術教育のあり方に関する検討会報告書. 厚生労働省医政局看護課.
- 細矢智子, 佐々木美樹, 山崎智代, 小山英子 (2008) 基礎看護技術の演習における患者役割体験による学生の認識と心理的状态. つくば国際大学研究紀要. 14: 189-201.
- 南妙子, 岩本真紀, 栗納由記子, 名越民江 (2008) 静脈血採血実習における看護学生の学びの分析. 香川大学看護学雑誌. 12: 37-46.

Analysis of questionnaire survey on learning from patient-role-playing experience of blood sampling training in nursing students

Reiko Hirata, Chiyo Yamazaki, Tomoko Hosoya, Koyama Eiko

Department of Nursing, Faculty of Health Science,
Tsukuba International University

Abstract

The questionnaire survey was conducted to clarify what the students thought and felt throughout the experience of patient-role-playing on the training of blood sampling in the practice of Fundamental Nursing Technology. Specifically, the questionnaire asked whether the patient-role-playing experience was helpful for students' understanding of the psychology of patients and the technical acquisition; whether the experience was useful for the students; and whether the students had any problems throughout the experience. The survey was performed in 58 of the nursing students, who had agreed with the aim and scope of the present study. With regard to the patient-role-playing experience, 1) 94.9% of the students felt positive as a useful experience; and 2) 98.3% of the students felt effective on understanding the patient psychology, and the frequent specific comment is "understanding of the uneasiness, strain, and/or fear of the patients," firstly and is "understanding of influence of the action of nurses on the psychology of the patients," subsequently; 3) and 98.3% of the students felt useful for an acquisition of the blood sampling techniques. The results reveal that the students feel learning the crucial techniques of the blood sampling throughout the patient-role-playing experience. (Med Health Sci Res TIU 1: 171-182)

Keywords: Fundamental nursing techniques; Training of blood sampling; Experience-based learning; Patient-role-playing